埴谷雄高作品集

回想・思索集

13

河出書房新社

埴谷雄高作品集13　©1980

一九八〇年三月二一日印刷　一九八〇年三月三一日発行

著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎　装本——杉浦康平

発行者——清水　勝

発行所——株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二—三二—二　電話　東京四〇四—一二〇一営業　四〇四—八六一一編集　振替　東京〇—一〇八〇二

印刷者——多田　基　印刷所——多田印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社　定価は函・帯に表示してあります

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

回想・思索集

目次

I

9——16 裂け目の発見——文学的小伝

17——21 『資本論』と私

22——28 平田さんの想い出

29——37 伊東三郎の想い出——「農民闘争」時代のこと

38——50 或る時代の背景

II 影絵の時代

53——60 発足の日

61——85 政治と文学と

86—95 戦後の畸人達
96—103 「夜の会」のこと
104—140 「近代文学」の存続
141—156 戦後の病歴
157—161 回復期の仕事

III

165—167 宇宙型と神人型
168—170 思想の幅

IV 薄明のなかの思想——宇宙論的人間論

173—178 生誕について
179—186 意識について
187—195 存在について

196—202 愛について
203—206 性について
207—215 政治について
216—226 革命について
227—238 芸術について
239—244 死について
245—255 宇宙について
256—259 あとがき
261—271 〈のつぺらぼう〉と〈仏〉—森川達也
273—287 解題—白川正芳

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

裂け目の発見——文学的小伝

ぼくは台湾で育ったんです。台湾は植民地としては豊かな土地でした。だけど、朝鮮でもそうだったと思いますけれど、植民地で育った人たちは、なんといっても、精神の二重構造を持つようになる。日本人は、その当時は十万ぐらいしかいなかったろうと思うんですが、約七、八百万人の本島人に対して絶対支配的な立場にたっていた。それが子供の眼にも、ときどき、破れて見える。たとえば野菜とか魚を本島人が売りにくる場合、細君たちは値ぎるわけです。ある程度どころか、度を越えて相手がだめだっていってもなお値ぎるわけです。ひどい場合は四銭とか五銭とか自分でつけた値段の金だけ置いて、家の中へはいってしまう。また、ひどい男は人力車に乗って、車夫の頭を後ろから蹴る。そういう時に子供のおさない心も二つに破れざるを得ない。まだ、子供ですから、植民地の位置については格別わからないわけですが、人間のやりきれない抑えた表情に胸を破られる。やたらにいばっている日本人に屈服して、いやいやながら従っている人間が別にいるということがぼんやりした棘となってわかる。そのわかりかたをどう深めるかはその後の問題だけれども、どんな子供でも植民地で育てば、そういう二つに裂けた感じをたえずもつわけですね。だから台湾に育ったということはやはり意味がある。

われわれは政治にせよ文学にせよ、今あるもの以外のなにかに目を向けようとしますね。それは与えられた現在に裂け目を見つけることから発するのですけど、それを偶然見つけるか、あるいは意識的に追求するか、それはその人によって違うでしょう。しかし、裂け目をどんなときにどんなふうに見たかということで

その人間の方向がだいたい決ってきますね。文学をやるということは、おそらく、幼年時代、少年時代、青年時代に一生忘失しがたいような裂け目に直面したということでしようね。ところで、勿論、社会でも家庭でもその裂け目を隠蔽するということがおこなわれるのですから、私達はたえず目を鈍磨させられるということもありますね。

読書は非常に早くからしました。小学生の頃からです。あまり濫読するので、うちの父から読書を禁止されましたね。そんなに本を読むな、体があんまり丈夫じやないから、遊べというわけです。しかし、本好きにはそんなことをいつてもだめですよ。ぼくは、ときどき、ろうそくを持つて戸棚へはいつちまつた。押入れのなかで読んだんですね。それから外では樹の上に登つて読んだ。これは気分がせいせいして、しかもちよっと滑稽でしたね。子供の読むような本も、もちろん読んだんですけど、子供の読まないもの、解りそうにないものも、そこにあれば手あたり次第になんでも読んでしまつた。読み方は早かつたですね。そういう本を父や母が見ると、こういう本がわかるのかしら、と、いつもいつてましたが、今、考えると、たといわからなくとも読んでいたんですね。少年時代は、ふしぎなもので、字が書いてあるというだけで、よくわからなくても、とにかく読み通すのですね。だから、今そういう子供がいれば、やつぱり読むなといつても、それはだめですね。

中学三年の頃、その時はもう東京へ来ていましたが、高所恐怖症の原因となるべき事態に遭遇した。私達中学生七、八人が二階から窓の外を眺めていたんです。斜め下方に入口の屋根があつて、その屋根までの間隔は一間ちよっとぐらいだつた。すると、ぼくの友人がぼくの帽子をとつてその屋根の上へ投げたんです。それが屋根の上にうまくのつた。その頃、リチャード・タルマッヂという俳優がいましてね。これは軽業師出身で、水泳のダイビングみたいなフォームでどこでもとんでしまう。向うからひとが追つてくると、その頭の上をダイビングみたいにとんで、その向うでくるつとひつくりかえつて、立ち上る。そういう軽業師出

身の俳優がいたんです。ぼくたちは、その身軽なフォームを映画でよく見ていて、タルマッヂをするといつて、窓からとびこんだりしていたので、身が軽いという意識があつたんですね。実際は軽くなどなかつたんですが……。それですぐ反射的に帽子をとりに行つた。とりに行つたのは……こういうふうに校舎の羽目板にそつて横柱の縁が一寸五分か二寸ぐらいつきでているところがある。これがもう少しでていればいいんですが、そこの縁へ、羽目板に身体をぴつたりつけて乗つたわけです。靴をはいたままですからね。いま想いだしても、よく身体がそらなかつたと思いますね。こう両手を十字にひろげて、二直角に開いた靴をそろそろ動かして進むのです。もちろん靴の大半は縁からでてしまう。それでも、今いつたタルマッヂのまねをしていたせいか、とにかく、斜め下方の屋根までゆきついて、帽子をかぶつた。そして窓を見たら、その距離が一間以上ある。さあ、そこをゆけるかという気がした。非常な恐怖ですね。しかし、もう身体のほうは動きはじめて、帽子をかぶつたら、すぐ靴を出つぱりの縁へかけて羽目板にぴつたりすいついてしまつた。そして、そろそろ、戻つていつたけど、それがほんとうに虫の這うほどののろさで、そろそろ横すべりに靴を動かして行くわけですよ。そのとき、ぼくも、まつさおになつたし、見てるやつも、まつさおになつた。誰もものをいわない。二階といつても、一階自体が高くこしらえてあるから、三階近い高さがある。そして、下へ落ちればコンクリートですから、死ぬか、死なないまでも、大怪我をするにきまつている。じつに長い時間でしたね。実際は、恐らく、一分ちよつとくらいでしたでしようけど、長い、長い時間がたつた。そして、ようやく窓のそばまでいつて、やつと窓枠にとびついたら、そこに手がかかつただけで、身体はまるごとすとんと落ちた。それでも……やつと、なかへはいあがつたんですが、ぼくはむろんのこと、ぼくの帽子を投げたやつも、みんなまつさおになつてしばらくものもいいませんでしたね。その時から、ぼくは高所恐怖症になつてしまつた。ちよつとでも高いところは、だめなんです。それにぼくの高所恐怖症はとてもひどいんですね。平野謙君や山室静君と旅行して、たとえば自動車が崖つぷちを通る時、そつちを見られないんですよ。そんなにひどいなら席を替つてやろう、といつて細かに気をくばる平野君が替つてくれる。しかし

山道ですからね。今度はそっち側が崖になる。すると、まんなかへ坐れ、ということになつて、山室君と平野君のあいだにはさまつて、外を見ないでいる。それほどひどいんですよ。それが今いつた体験が根になつて、おこつた。そのときの一秒一秒の間に生命の名状しがたいような磨滅を感じたんですね。いわば絶望の底を歩くといつた体験をその些細な出来事から受けとつた。或る種の開眼というのは、結局、そういうことからおこるのでしようね。

台湾時代はいわば社会的な裂け目を感じたし、今いつた体験は、第二の裂け目、いわば存在論的な裂け目を覚えさせたのですね。

それから、いわば文学的体験のもう一つの要素はやはり刑務所でしよう。あの当時の学生の多くは左翼運動に加つていましたね。そして、刑務所にも多くはいつた。ところで、ぼくはよほど刑務所と性があつていたらしく、出てゆきたくなかつた。それで、執行猶予になつてでることになると、これは困つたなと思つたんです。だれにでも孤独癖はあるんでしようが、ぼくがこれほど閉じこもつているのが好きとは自分でも奇妙な気がしましたね。未決なので、独房なんです。一人で本を読みながら妄想にふけつていればいいんですが、それがぼくの性癖にぴたりとしていることにぼくは気づいた。孤独癖というけれど、一人で妄想していることが好きなんですね。それで、その時は、出てゆくのがいやでいやで、仕方がなかつた。ところが、うちの母などは、なぜでてくるのがいやかつていうのですね。お前は甘いものが好きだから、甘いものばかりたべてられるあすこがいいんだろつていうんですが、ほんとうに甘いものは好きでしてね。刑務所のなかでは購求つていうのが一週間に三回あつて、つまり一日おきに看守が何か買うものないかつて聞きにくるんです。そのとき大福餅なら大福餅を頼む。ところが、そうすると、その日は食べられても翌日は食えないということになる。これはだめだ、と考えて、白砂糖一斤という注文をしたんです。白砂糖を一斤買つて袋ごとそばにおいて本を読みながら口にいれている。刑務所から出た時に購求表を渡されたので、帰つてきて見る

と、ぼく自身も驚いたですね。だいたい一週間おきに、白砂糖一斤、白砂糖一斤って書いてあるんでしょう。母親が、なんぼなんでも、白砂糖一斤袋ごとおいてなめてるなんてひどすぎるというんです。この白砂糖一斤と本があるから、だから、出たくないんだなと、そういう解釈をするんですよ。子供の頃、ぼくはお菓子を缶ごと渡されてました。缶を股にはさんで、手だけそこにさしこんで食べながら、目の方は本を読んでるというぐあいで、そういう癖が子供の時からあったから、お前、刑務所にはいっても、砂糖なめながら本読んでいるんだね、といわれました。平野君は、一番の楽しみは炬燵にはいって南京豆食べながら探偵小説を読むことだなんてよくいうんですが、ぼくはどうもただぼんやり妄想していることがいちばんいいらしい。

それから、裂け目というともうひとつ思いだされるものに、運動時代のスパイ事件というのがありますね。ぼくが知っていたのは大泉兼蔵という男ですが、宮本顕治達が査問しているとき、全協関係の小畑という男がショック死したという事件がありましたね。そのとき、農民関係では大泉が監禁されていたんです。ぼくもくわしいことは知りませんけれど、話にきけば、女の人一人がピストルを持って大泉を見張っていた。そこは二階だったのですが、偶然、警官が窓の下を通ったとき、助けてくれ！ と叫んだらしい。見張り役は結局ピストルを撃てず、警官につかまってしまった。この大泉は新潟の全農支部にいました。昭和六年の暮に新潟の細胞がやられた時、逃げて報告に上京してきた。当時は党の中央部に労働者農民出身のものを引き上げるという方針があった。なにしろ弾圧つづきですからどうしてもそういう人物が少い。それで農民部でも、地方からきたものをさかんに引き上げた。たとえば三重からきた池畑勘七、山形からでてきた佐久間次郎、富山からの梶哲次、谷川直平といったひとびとをそのまま中央にとめておくことになった。佐久間次郎なんか長いあいだ、ぼくのうちに泊ってました。ところが都会生活に馴染んでいないものですから、なにかことがあるとへまをやるというか捕ってしまうんです。実際、会合を開いている時、襲われると、他のみんなはうまく逃げちやうんですが、地理をのみこんでいない関係もあってどうも捕っちやうんですね。佐久間

次郎も池畑勘七も捕つちまつたんです。そして、つぎつぎ捕つて困つている時に、大泉がでてきた。そこでこれもとめておくことになつた。ところが、今までの例もあるからなんとか早く都会化しなくてはならない。大泉の容貌はどうみても農民ふうで都会化できるような人物ではなかつたけれども、しかし格構だけは変えねばならないということになつた。いまも党にのこつていて経済学をやつてる守屋典郎は岡山の市長の息子で、われわれのあいだでは金持だつたのですが、その守屋のところへいつて二重廻しをよこせと収奪した。この守屋典郎は、ぼくたちがやられたあと、松本三益といつしよにこの大泉を「オッサン」と呼んで一緒に働くことになつたのですから、はじめから縁があつたのですね。そんなことで大泉も格構だけは都会化した。ところが翌年に、つまり昭和七年の三月にぼくたちがいつせいにやられちやつた。ぼくたちというのは、エスペラントを長くやつていて、サンチャンと呼んでいた伊東三郎、ズボさんと呼んでいた小崎正潔、俳優やつていた伊達信、それにぼくの四人がやられた。そして、「農民闘争」は、壊滅状態になつた。後に残つていた永原幸男、守屋典郎、松本三益などが「農民闘争」の終刊号をやつとだしたというぐあいです。ところが、当時農民部長をしていた赤津益造、これは四・一六でやられて保釈中潜つてきた人物ですが、これも、また、間もなくやられてしまつた。すると、労働者農民出身者を引き上げる方針もあつて、のこつた大泉が農民部長になつちまつた。ところが、この大泉が変だということになつた。なにしろ有名なスパイの松村がいた時代で党内は錯綜していた。そして、けつきよく、大泉を檻禁して査問することになつたのですね。後で守屋典郎に聞いたのですが、大泉のスパイ説は根拠のあることだつたそうです。ところが、そういうことを全然ぼくたちは知らない。ぼくは大泉の世話役で、ずつと後まで信用していた。大泉スパイ説を聞いてからもその説を疑つていた。今から考えると、まつたく洞察力がない。あの当時のスパイをつくる方法は、何かで捕つた時にときどき報告すると約束させた上で釈放するという場合が多かつたのですね。ロシヤでも、日本でもそういう約束で釈放したスパイが多かつた。そのほかに、もう一つの方法は、松村という、あの当時有名なスパイのはいり方ですね。これははじめつからスパイにしたてあげるつもりで、組合なら組合、政

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com